

日本気象学会 2012年度春季大会

会期：2012年5月26日（土）～29日（火）

会場：つくば国際会議場（エポカルつくば：茨城県つくば市竹園2-20-3, <http://www.epochal.or.jp>）

大会実行委員会担当機関：気象研究所

大会委員長：瀬上哲秀（気象研究所）

当日の会場への連絡先：大会実行委員会事務局（つくば国際会議場小会議室301）

TEL 029-861-0601（大会期間中のみ有効）

※大会参加者への伝言は、受付付近の掲示板上に掲示します。

取り次ぎはいたしませんのでご承知おきます。

会場案内図



交通の案内

- つくば駅・つくばセンターまで
 - ・つくばエクスプレス (TX)：「つくば駅」行きに乗車，終点「つくば駅」下車。
 - ・JR常磐線：「土浦駅」西口2番バス乗り場，「ひたち野うしく駅」東口1番バス乗り場より，「筑波大学中央」または「つくばセンター」行きバスに乘車，「つくばセンター」にて下車（ともに所要時間約25分）。
 - ・高速バス：東京駅八重洲南口の高速バス5番のりばより，<つくば号>「筑波大学」または「つくばセンター」行きに乘車，「つくばセンター」にて下車（所要時間約65分）。羽田空港第1・第2各ターミナル1階到着ロビー13番のりばより，「つくばセンター」行きに乘車，終点「つくばセンター」にて下車（所要時間約80分）。
- つくば駅・つくばセンターから つくば国際会議場まで
 - ペDESTリアンデッキ（歩行者専用道路）に昇り，直進（徒歩約10分）。

講演の方法

一般口頭発表・専門分科会

- ・ 一般口頭発表の講演1件あたりの持ち時間は10分（講演8分・質疑2分）です。
- ・ 専門分科会の発表時間についてはコンピーナーからの指示に従ってください。
- ・ 講演にはPCプロジェクターを使用できます。
- ・ 講演にあたり、予め以下の点をご了承ください。
 - ✓ パソコンは各自で準備して下さい。会場にはプロジェクターおよび接続ケーブルのみを準備します。
 - ✓ セッション開始前の休憩時間などを利用して、必ず接続の確認を行っておいて下さい。また接続が不安な場合は、セッション開始前に会場係に申し出て下さい。
 - ✓ 突然の故障や接続の際のトラブルが発生した場合、座長の判断で発表順の繰り下げなどの対応することがあります。携帯用メディアによるバックアップファイルの準備など、トラブルへの備えは講演者自身で行って頂くようにお願いします。

ポスター発表

- ・ 講演者はポスターに表題と著者名を明記して下さい。
- ・ ポスター発表の一人当たり使用可能面積は、縦210 cm×横90 cmとなっています。
- ・ ポスターを掲示する際には画鋲をお使い下さい。必要な画鋲は講演者自身でご用意ください。なお、テープは使用することができません。
- ・ ポスターの掲示可能時間は各日とも09:30～16:30となっています。大会第4日目は使用できません。会場の都合上、特に撤収は毎日時間厳守をお願いします。
- ・ ポスター会場での機器の使用は、講演申し込み時に予め申し出ていたもの以外は原則として認められません。
- ・ ポスター会場では電源は使用できません。

シンポジウム

「放射性物質等の移流拡散問題 ―モニタリング、予測、防災情報―

日時：大会第2日（5月27日）13:30～17:00

会場：つくば国際会議場大ホール

司会：三上 正男（気象研究所）

趣旨：

東日本大震災に伴う福島第一原発事故により、大量の放射性物質が大気海洋中に放出され、それらは移流拡散及び沈着過程を通じて広範な地域に甚大な被害をもたらしている。本シンポジウムでは、このような災害をもたらす放射性物質等の移流拡散のモデル再現・予測技術やモニタリングの過去・現在・未来を議論すると共に、こうした甚大災害の防災情報の公開・提供について我々大気科学者はどう考えどう行動すべきかについて議論を行う。

基調講演：

- 1) 「放射性物質の大気輸送・沈着モデルの現状と課題」
大原 利真（国立環境研究所）
- 2) 「原発災害時の環境モニタリング ―課題と展望―」
恩田 裕一（筑波大学大学院生命環境科学研究科）
- 3) 「災害情報の観点から見た原子力防災 ～避難から復旧・復興までの課題と教訓～」
首藤 由紀（社会安全研究所）
- 4) コメント「事故調査報告書を読む」
五十嵐 康人（気象研究所）

総合討論

※各講演時間は30分です。

総 会

日時：大会第3日（5月28日）13:30～15:50

会場：つくば国際会議場大ホール（つくば市竹園2-20-3）

議事次第

1. 開会
2. 議長選出
3. 理事長挨拶
4. 2012年度日本気象学会賞授与
5. 2012年度藤原賞授与
6. 2012年気象集誌論文賞及びSOLA論文賞の授与報告
7. 議事
 - (1) 2011年度事業報告
 - (2) 2011年度収支決算報告
 - (3) 2011年度監査報告
 - (4) 日本気象学会第37期役員選任について
 - (5) 2012年度事業計画（案）
 - (6) 2012年度収支予算（案）
 - (7) 公益法人移行に伴う新定款（案）、新細則（案）
8. 報告
9. 議長解任
10. 閉会

専門分科会の概要紹介

2012年度春季大会では下記の通り、7件の専門分科会が開かれます。

岸保勘三郎先生の業績を偲ぶ：日本の数値天気予報の発展を振り返り、将来を展望する

日時：大会第1日（5月26日）10:00～11:30

場所：A会場

趣旨：東京大学名誉教授の岸保勘三郎先生が2011年9月19日に87歳で逝去されました。岸保先生は1952年に米国のプリンストン高等研究所に招聘され、von Neumann, Jule Charneyと世界初の数値天気予報の開発に従事されました。日本に帰国された後は、気象庁にて数値天気予報の導入、発展に大きく尽力されました。また、先生は1970年に東京大学に移られた後は理学部教授として教育に貢献されると共に、日本気象学会理事長として日本の気象学会を牽引されました。国際的には、Joint Organizing Committee (JOC)のメンバーとしてGlobal Atmospheric Research Programme (GARP)を推進され、衛星観測による数値天気予報の精度向上に貢献されました。この分科会では、先生が関わられた数値天気予報の分野を中心とした発表を行い、先生の業績を偲びます。

コビーナー：時岡達志（海洋研究開発機構）、露木 義（気象研究所）、楠 昌司（気象研究所）、佐藤 薫（東京大学）

東アジアモンスーンと黒潮(II) —中緯度大気海洋相互作用に着目した新たな研究のパラダイム

日時：大会第1日（5月26日）13:30～17:00

場所：B会場

趣旨：日本の周辺海域では、黒潮が熱帯から運んできた大量の熱が、顕熱や潜熱の形で狭い領域に集中して大気に受け渡されている。この海域は、同じく西岸強化流の影響を受ける北米東岸とならび、海洋から大気への熱の受け渡しを担う気候系のHot spotともいえる重要な領域であり、この海域に注目して、中緯度域の大気海洋相互作用を明らかにするため活発な研究活動が始まってい

る。日本の気候を特徴づける冬の降雪、梅雨、ヤマセ、爆弾低気圧などの活発な低気圧活動、台風なども、中緯度大気海洋相互作用の視点から見直すことで、季節予報の精度向上へも貢献しうる新たな研究のパラダイムが期待できる。本分科会では、日本周辺海域の大気海洋相互作用やそれに関わる大気や海洋の現象について、理解を深め、研究のレベルを向上させることを目標として、観測、データ解析、数値シミュレーションなど、研究手法は問わず、大気、海洋分野の参加者を得て、活発な議論を行いたい。良くまとまった研究の紹介やレビューも歓迎するが、観測などの研究成果の速報、新たな研究課題の創出に繋がるアイデアなども積極的に発表して頂き、議論を深めたい。大学院生などの若手による発表、討論への参加を大いに歓迎する。

コビーナー：児玉安正（弘前大学）、富田智彦（熊本大学）、中村知裕（北海道大学）、立花義裕（三重大学）、高谷康太郎（海洋研究開発機構）、中村 尚（東京大学）

中層大気研究の新展開

日時：大会第1日（5月26日）13:30～17:00

場所：C会場

趣旨：現在、中層大気分野においては、対流圏・成層圏にとどまらず中間圏や下部熱圏を含む上下結合や、中層大気を介した南北半球間結合などにおいて、大きな研究進展がみられている。ここ数年、中層大気科学分野では、春の学会の時期には、力学にとどまらず、大気化学や超高層大気物理学分野との連携を考慮し、日本地球惑星科学連合の連合大会において毎年セッションを開催してきた。本分科会では、中層大気分野の最新の研究発表を広く募り、気象学会において、地球大気における中層大気的位置づけを改めて議論する場としたい。

コビーナー：佐藤 薫（東京大学大学院理学系研究科）、三好勉信（九州大学大学院理学研究院）、堀之内 武（北海道大学地球環境科学研究院）

都市域における極端気象のメカニズム解明

日時：大会第1日（5月26日） 13:30～17:00

場所：D会場

趣旨：近年、大都市圏で局所的に突然発生する積乱雲がもたらす豪雨や竜巻などの極端気象が注目されている。交通や通信網が高度に発達した都市では、一度こうした大気現象が発生すると、道路や地下街などで降った雨が狭い箇所に一気に流れ込むなどして大きな被害が発生することが多くなっている。このような都市域に発生する極端気象に対しては、気象情報を適切に発表し、防災関係者などが的確に行動できるようにする必要あるが、現時点ではまだ不十分である。これは積乱雲が発生・発達し大雨や突風をもたらすまでの詳細な物理的なメカニズムが解明されておらず、対応した監視・予測技術も開発されていないためである。そこで本分科会では、局地的大雨などをもたらす積乱雲を対象として、最新の気象観測や数値実験により、局地的大雨の発生や維持機構に焦点を当てて積乱雲の発生・発達・消滅のメカニズム解明のための議論を行なう。

コンピーナー：真木雅之（防災科研）、藤吉康志（北海道大学）、中北英一（京都大学）、小林文明（防衛大学校）、小林隆久（気象研究所）、山田芳則（気象研究所）、足立アホロ（気象研究所）

2011年の台風 一台風研究・技術の現状と課題一

日時：大会第4日（5月29日） 13:30～17:00

場所：A会場

趣旨：2011年は、9月末までに既に3個の台風が日本本土に上陸し、各地に災害をもたらしたことから、台風が着目される年となった。中でも大雨を伴った台風12号による死者・行方不明は93人にのぼり、平成最悪の台風災害といわれている。また台風15号は日本の南で急発達後、日本列島に沿って北上し、広い範囲で災害をもたらした。2011年の台風の特徴として、事例によって様相が大きく異なっていたことが挙げられる。2004年に10個の台風の日本本土上陸があって以降、台風に関する研究から多くの知見が得られた。しかし、それらの知見をもって今回の台風を説明することができない。そこには、気象・気候学的研究及び現業解析・予報技術において未解明な課題が残されている。今回、これまでの台風に関する研究や2011年の台風を通して明らかになった課題についてさまざまな角度から議論を行い、今後の台風研究の方向性を示すことを目的とする。

コンピーナー：北島尚子（気象研究所）、和田章義（気象研究所）、國次雅司（気象庁太平洋台風センター）

波と平均流との相互作用

日時：大会第4日（5月29日） 13:30～17:00

場所：B会場

趣旨：波と平均流との相互作用の研究は、Eliassen and Palm (1961) や Charney and Drazin (1961) 等の業績を嚆矢とし、80年代にかけ理論的に大きな進展が見られた分野である。またその研究成果は理論的に興味深いというだけでなく、Eliassen-Palm (EP) flux に代表されるように実際の解析にも有効であり、実際 EP flux は現在でも標準的な解析ツールの一つとなっている。その後、この研究は一時やや下火となったものの、21世紀に入り、日本を中心に再び盛り上がりを見せているように感じられる。新たなフラックスの提案や、相互作用のラグランジュ的記述に関する研究等、興味深い研究が現在も進展中である。そこで、(なぜか) 再ブームとなった「波と平均流」の最先端の研究について議論すべく、本専門分科会の開催を企画した。数値モデル研究真っ盛りであるが、その基盤として力学理論がある事は論を待たない。この専門分科会が、地球流体力学の基礎理論の更なる発展、延いては大気海洋科学への応用に繋がれば幸いである。

コンピーナー：高谷康太郎（海洋研究開発機構）、榎本剛（京都大学防災研究所）、林祥介（神戸大学）、宮原三郎（九州大学）

温室効果ガス観測技術衛星 GOSAT「いぶき」の利用研究

日時：大会第4日（5月29日） 13:30～17:00

場所：C会場

趣旨：2009年1月23日に打ち上げられた温室効果ガス観測技術衛星 GOSAT「いぶき」は、現在も順調に観測を続けている。GOSAT は宇宙航空研究開発機構 (JAXA)、環境省 (MOE)、国立環境研究所 (NIES) の共同プロジェクトであり、亜大陸規模での二酸化炭素の発生・吸収強度の推定誤差の半減を最大の目標としている。これまでにスペクトルデータの改良と解析アルゴリズムの改訂が複数回行われ、二酸化炭素とメタンの濃度データの解析精度も向上してきている。このことを踏まえ、本セッションの前半では、これまでのセンサー性能とデータ品質の履歴、解析アルゴリズム等についてプロジェクト関係者を中心に発表を行う。後半では、配布されたデータを用いた研究発表のほか、他衛星との複合利用など、幅広い分野の研究発表を募集する。これには、CAI センサー等を用いたエアロゾルや雲に関する発表も歓迎する。本分科会を GOSAT データの有効性と発展性をより広く議論する機会としたい。

コンピーナー：今須良一（東大大気海洋研）、井上元（東大大気海洋研）、横田達也（国環研）、中澤高清（東北大）、中島映至（東大大気海洋研）

公開気象講演会のお知らせ

※参加は無料です。

日時：2012年5月26日（土）（大会第1日）13:30～17:00

場所：つくば国際会議場

大会議室 101 (1F) (大会 A 会場)

テーマ：「地球温暖化問題における科学者の社会的役割」

主催：社団法人 日本気象学会
教育と普及委員会・地球環境問題委員会

後援：一般社団法人 日本気象予報士会

趣旨：日本気象学会 2012 年度春季大会の開催に合わせて、一般市民の方々に気象に関する最近の研究成果や関心の深い事柄についてわかりやすく解説することを目的とした公開気象講演会を開催します。今回は教育と普及委員会と地球環境問題委員会との共催で「地球温暖化問題における科学者の社会的役割」をテーマに取り上げます。気象学会の多くの研究者は、温暖化研究を推進する中核となり、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)に科学的資料を提供することで、国策としての CO₂削減を後押ししてきました。しかし、日本の国家の威信をかけて推進した京都議定書に対し、COP17(第 17 回気候変動枠組条約締約国会議)における政府の方針は、離脱こそしないものの削減義務を負わない自主削減へと一転しました。また、科学的根拠に乏しい温暖化懐疑論や、いたずらに危機感をあおる扇情的な温暖化地獄論などがマスコミに大きく取りあげられています。そのような背景をふまえ、気象学会は科学的に中立公正な立場で温暖化の真相を解説し、一般市民への温暖化と気象リテラシーの向上に全力で取り組む必要があります。講演会では、気象学会としてこの問題に取り組んでいる専門家を中心に、温暖化問題をどのように考えているのか、忌憚のない意見を紹介していただくとともに、気象学者としてこの問題にどのように取り組むべきか、科学者としての社

会的役割は何かについて議論いただきたいと思います。ふるってのご参加をお願いします。

司会：中島映至(東京大学大気海洋研究所)

テーマおよび講演者：

1. 「地球温暖化に伴う水循環変化」
名古屋大学地球水循環研究センター 安成哲三
2. 「地球温暖化に占める自然変動の影響を我々は過小評価していないか」
筑波大学大学院生命環境系 田中 博
3. 「地球温暖化予測と数値天気予報 — 不確実性を伴う将来の予測」
京都大学大学院理学研究科 余田成男
4. 「地球温暖化対策 — 緩和と適応」
東北大学大学院理学研究科 岩崎俊樹
5. 「地球温暖化の科学と社会の意思決定」
国立環境研究所 江守正多
6. 「地球温暖化論争を超えて — 科学技術への信頼を守るために」
日本気象予報士会 田家 康
7. パネルディスカッション

問い合わせ先：氏家将志(教育と普及委員会)

TEL: 03-3212-8341(気象庁代表電話)

内線 3321

E-mail: ujiie@met.kishou.go.jp

研究会のお知らせ

何れも参加は無料・事前の申込も不要ですので、興味のある方はご自由にご参加下さい。

第37回メソ気象研究会

日時：2012年5月25日(金)(大会前日)13:30~17:30

場所：気象庁講堂(東京都千代田区大手町1-3-4)

テーマ：「再生エネルギーとメソ気象との関わり」

コンビーナー：加藤輝之(気象庁数値予報課)、大関崇(産業技術総合研究所)

内容：昨年の第35回メソ気象研究会「メソ気象研究の将来展望・構想」では、メソ気象研究の今後の発展のためには多分野との連携について強化すべきだという議論がなされました。今回のメソ研究会では、その議論を受け、昨年の大震災以降に脚光を浴びている再生エネルギーの活用に対してメソ気象学がなせる役割について考えることにしました。

太陽光や風力発電などの再生エネルギーを効率よく活用するためには、事前に日射量や地表風をできるだけ正確に予測することが必要であり、その予測技術を向上させるためにはメソ気象学の知見が求められています。ユーザー側からの要求もふまえ、現状の問題点および解決すべき課題について話題を提供していただき、今後の連携についても議論したいと考えています。幅広い方面からの多くの方々のご参加と活発な議論をお願いします。

プログラム：

13:30-13:40 趣旨説明

13:40-14:10 荻本和彦(東京大学生産技術研究所)「再生エネルギーの大量導入時のエネルギーシステムの計画・運用に必要な情報」

14:10-14:35 長澤亮二(気象庁気候情報課)「気象庁数値予報モデルにおける放射過程」

14:35-15:05 大竹秀明(産業技術総合研究所)「太陽光発電量予測に向けた気象庁メソモデルの日射量検証」

休憩

15:20-15:50 谷川亮一(伊藤忠テクノソリューションズ)「気象情報を利用した風力発電出力予測について」

15:50-16:20 伊藤純至(東京大学大気海洋研究所)「大気境界層内の乱流と数値モデルが表現する風速」

休憩

16:30-17:30 総合討論

世話人：坪木和久(名大地球水循環)、加藤輝之(気象庁数値予報課)、小倉義光(東大大気海洋研)

連絡先：加藤輝之(気象庁数値予報課)

E-mail: tkato@mri-jma.go.jp

URL: <http://meso.sakura.ne.jp/mesoken/>

注意事項：自家用車でのご来庁はご遠慮下さい。正面玄関(KKR東京側)をご利用ください。研究会の受付で名札を受け取り、着用して下さい。

第12回統合的陸域圏研究連絡会

日時：2012年5月26日（土）（大会第1日）17:30～19:30

場所：つくば国際会議場

小会議室403（4F）

内容：「統合的陸域圏研究連絡会」においては、陸面を中心とする大気境界層から土壌内に渡る陸域圏を主な研究対象とし、以下の目的により活動を行っています。

- * 陸域圏における物理的、生物的諸過程の理解に向けた、広い視野に立った研究のための情報交換
- * 陸域圏を対象とした基礎的なメカニズムの理解と、他の圏との広域的・長期的相互作用システムの解明
- * 直接観測、間接観測、およびモデリングの融合
- * 空間的・時間的スケール間ギャップの問題の解決
- * 正確な現状の認識と、実質的に意味のある手法の開発
- * それらのための研究協力関係の構築

今回は、地球環境変動監視にとって非常に有力な手法となっている衛星リモートセンシングに関する最新の話題として、3名の招待講演者による講演を中心に研究会を開催いたします。

講演者および講演題目：

本多嘉明（千葉大学）

「GCOM-C1/SGLIによる陸域モニタリングへの貢献」

梶原康司（千葉大学）

「二方向性反射率による地上バイオマス推定とGCOM-C1について」

藤井秀幸（宇宙航空研究開発機構）

「マイクロ波放射計による衛星陸面観測」

世話人：馬淵和雄（気象研）、大谷義一（森林総研）、奈佐原顕郎（筑波大）、伊藤昭彦（国環研）、佐藤 永（名大）、大石龍太（東大）、立入 郁（海洋研究開発機構）、近藤雅征（福島大学）

代表連絡先：馬淵和雄（気象研）

TEL：029-853-8722, FAX：029-853-8728

E-mail：kmabuchi@mri-jma.go.jp

気象教育懇談会

日時：2012年5月26日（土）（大会第1日）17:30～19:00

場所：つくば国際会議場

小会議室405（4F）

テーマ：「サイエンスカフェの活動紹介と今後の展望」

内容：出前授業やアウトリーチ、さらにはボランティア活動などを通じ、児童生徒及び一般市民を対象にした教育普及活動が盛んに行われるようになってきている。こうしたなかで、お互いのミスマッチや一方通行になりがちな課題も浮き彫りになりつつある。今回は、東京で開催されている気象サイエンスカフェ（日本気象予報士会、教育と普及委員会共催）と日本気象予報士会「サニーエンジェルス」（幼児をもつ母親世代を対象とした活動）からの話題提供をお願いした。これらの話題から、今後はこうした活動をいかに効

率よく実施していけばよいか、お互いにとりより有益な方法はどうかを皆さんとともに議論してみたい。アウトリーチ活動などの経験をお持ちの方のご参加を期待したい。

世話人：石原幸司（気象研）、宮下 敦（成蹊中学高校）、畠山正恒（聖光学院）

問い合わせ先：教育と普及委員会

畠山正恒（聖光学院中学高校）

TEL：045-621-2051

E-mail：hatakeya@hotmail.com

極域・寒冷域研究連絡会

日時：2012年5月26日（土）（大会第1日）17:30～19:30

場所：つくば国際会議場

中会議室202（2F）（大会D会場）

趣旨：比較的温暖な秋季から一転して、2011/2012年の冬季は2005/2006年以来の厳冬となった。北日本における気温は12月から1月にかけて低温偏差となり、東日本・西日本においても12月中旬から1月にかけた低温偏差が顕著となっている。なかでも、東日本・西日本を中心に12/9、12/16、12/25、1/4には周期的な寒波の襲来が見られたほか、1/10付近にも北日本に大雪をもたらした寒波、1/24には関東地方にも降雪をもたらした寒波が存在した。新潟、松江といった日本海側の都市、あるいは青森といった都市においても多くの積雪が見られ、交通障害や除雪予算不足が社会問題として注目された。こうした厳冬の「犯人」として定着した感のあるキーワードとして「北極振動」、「ラニーニャ現象」あるいは「ブロッキング」が挙げられる。しかしこれらの指標は日本における厳冬の予報的指標としてどこまで有効なのだろうか？本会では予報業務を行う現場から今年の厳冬をふりかえる話題提供をいただくともに、こうした指標と日本の厳冬との関係をレビューし、今後の研究の精緻化にむけた議論を行う。なお当日は、二人の発表者による話題提供だけでなく、飛び入りによる発表も歓迎する。

話題：「厳冬をもたらす大気循環 -2011/2012の冬季をふりかえる-」

「2011/12年冬の気象循環の特徴」

大野浩史、萱場互起、田中昌太郎、原田やよい（気象庁）

「厳冬をもたらす主役たち：北極振動、ラニーニャ現象、そしてブロッキング」

堀 正岳、猪上 淳（海洋研究開発機構）

話題：飛び入りの発表も可。

問い合わせ先：堀 正岳（海洋研究開発機構）

TEL：046-867-9489, FAX：046-867-9437

E-mail：mehori@jamstec.go.jp

大会期間中の保育支援について

大会実行委員会では、大会に参加される学会員のために、次の保育施設を紹介致します。

・キッズクラブつくば

〒305-0051 茨城県つくば市二の宮 1-24-8

パルシヤスつくば 1F 101 号

TEL: 0120-38-8373

<http://www.kids-house.jp/>

・チャイルド・クラブ・パンセ

〒305-0051 茨城県つくば市二の宮 1-21-3

グランドパレス NS-1 102 号・106 号

TEL: 029-861-1500, FAX: 029-861-1700

[http:// www.childclub.e-tsukuba.jp/index.htm](http://www.childclub.e-tsukuba.jp/index.htm)

施設の利用を希望される方は、利用日の 7 日前までに、下記担当者までご連絡ください。また、利用料金の一部補助についても検討中です。上記施設またはそれ以外の保育施設の利用について、補助を希望される方は 5 月 18 日(金)までに、下記担当者までご連絡ください。

連絡先：増田一彦（気象研究所）

E-mail：masuda@mri-jma.go.jp

TEL：029-853-8577

リクルートブースの試験的導入について

日本気象学会は、若手・任期付研究者のキャリア形成をサポートするために、2011 年度春季大会から大会会場にてリクルートブースを試験的に導入することとしました。これは、気象学会に所属する大学院生や有期雇用の若手研究者が、広く民間企業にて適職に出会うのをサポートするための試みです。ブースでは、企業の就職担当者と就職を希望する参加者との間で直接情報交換をして頂きます。参加予約等の手続は不要です。

ブースはポスター会場内に併設し、コアタイム（ポスター発表時間～昼休み）を中心に、企業側担当者が対応しま

す。

なお、リクルートブースに出展予定の企業と出展予定日は以下の通りです（2012 年 4 月 4 日現在）。

一般財団法人日本気象協会（展示ブースに併設、5/28）

東京ダイレック株式会社（展示ブースに併設、5/26～5/28）

秋季大会の予告

2012年度秋季大会は、2012年10月3日（水）～5日（金）に北海道大学で開催される予定です。